

神奈川県生涯学習審議会（第 14 期）

第 1 回審議会概要

第 1 回 審議会	開催日	平成 31 年 1 月 24 日（木） 10:00～12:00
	内 容	<p>○第 14 期生涯学習審議会会長・副会長の選出について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会長に鈴木真理委員、副会長に小池茂子委員を選出した。 <p>○生涯学習審議会に対する神奈川県教育委員会からの諮問</p> <ul style="list-style-type: none"> ・神奈川県教育委員会から、「神奈川県におけるこれからの家庭教育支援のあり方について」の諮問があり、これを今期のテーマとして調査審議を行うこととした。 ・事務局から、審議会の運営と、家庭教育支援に関する資料についての説明が行われた。 ・自己紹介を兼ねて、各委員が諮問内容に関する意見を述べた。

【家庭教育支援を取り巻く現状に関する主な発言】

- 働くお母さんに対する社会的支援は活発になっているが、果たして、お母さんが子どもと話す時間がとれているのか、といった具体的な危惧を抱くことは増えている。
- SNS の普及により、学校に関する情報が、保護者同士のやり取りのみで独り歩きする傾向があり、学校としては課題と感じている。
- PR の方法が効果的でなく、よい取組もきちんと伝わっていないことが心配。
- 海老名市では、「家庭教育学級」や、放課後の子どもの居場所づくりとして学童保育、放課後子ども教室などを行っているほか、「若者支援室」において引きこもりに対する相談対応等を行っている。
- 誰もがちょっとしたことで孤立化してしまうハイリスクな社会状況であると感じている。経済的な貧困だけでなく、関係性の貧困が広範に広がっている。

【諮問内容「家庭教育支援のあり方」に関する主な発言】

- 「家庭」と「支援」に特に力を入れて進めるべき。困っている家庭、つながれない家庭を、どうつないでいくかが大きなテーマ。
- 家庭教育支援において、障がいを持つ保護者や子ども自身にも光をあてていかなければならない。また、「医療的ケア児」のような、法の狭間にある子どもやその保護者への視点も必要である。

- 子どものことで困り感を持っている保護者は、学校に対し本音を言えないことが多いように思う。そんな時に、まわりでサポートできる、保護者が本音を語れる組織があるとよい。
- 地域の様々な問題が重なった形で顕れてきている。家庭教育支援に関する課題についても、もっと地域ぐるみ、街ぐるみでみんなが助け合える共生社会がつくっていければ、街もよくなるのではないかと思う。
- 人は世話されるだけでなく、世話することで心のバランスがとれると感じる。これからは、女性も、外国人も、障がい者も、障がい児も、みんなが地域の中で役に立てるような地域社会ができるといいと思う。
- 厚木市の「地域ぐるみ家庭教育支援事業」は、地域のみんが困難になる前に、ネットワークを広げて、家庭どうしを結び付け合う事業が必要と考え、地域全体で支え合う地域づくり、街づくりをしていく趣旨で立ち上げた。
- 現在、どんな社会的課題から入っても、公民館を拠点として身近な暮らしや関係性を豊かにすることの重要性に行きつく。社会教育の重要性がとても重要になっている。
- 新たな取組を立ち上げるのではなく、既存の取組を家庭教育の視点から再評価し、意味づけしなおすことは意義がある。というのは、様々な社会的課題に対してそれぞれ施策が打たれ、いずれも、それを実際に引き受けるのは地域社会という状況で、地域の負担過多になっている。
- (家庭教育支援を考えるにあたっては、) 当事者の視点が必要。当事者の視点が失われると支援が支援でなくなることがある。
- 大学では、地域の企業と連携し、女性にも男性にも働きやすい環境や研究環境の整備を行っているが、これには、次世代育成という観点も含んでおり、家庭教育支援というテーマにも関わると思われる。
- 大人の方で子どもを元気づけ、必要なことは教えていくことが大切。
- 生活習慣もそれぞれの家庭で異なる中で、支援チームを作って取り組むのはよいと思う。
- 食育という観点からも家庭教育支援について考えたい。

【今後の審議の内容や進め方について】

- (この審議会では、) 上から目線ではない、当事者の困難に寄り添うような支援について、行政には何ができるのかまとめていきたい。
- (家庭における教育について) 一つの価値観を示すのかどうか、どこを支援の焦点とするのか、また、(答申は) だれに向けたものとするのかといったことを考えなければならない。
- (検討にあたっては) SDGs の視点も必要